第３回　東京都「緑の広域計画（仮称）」策定に向けた有識者検討委員会

議事録

１．日　時　令和８年３月 11 日（水）10：00～12：00

２．場　所　都庁内会議室

３．議　事

１）「緑の広域計画（仮称）」中間のまとめ（案）

４．有識者からの意見

１）「緑の広域計画（仮称）」中間のまとめ（案）

①全体

・これまでの取組において成果をあげているにもかかわらず課題も多く、かつ他都市と比較して低い評価。それでも世界一をめざすという流れになっている。定性的な世界一なのか定量的な世界一なのか明示すべきである。

・全体を通して、観光・ツーリズムの観点が示されていないので、言及いただきたい。

・スポーツ、子供の視点が盛り込まれていることを評価するが、絵に描いた餅にならないよう具体的な施策を今後もお願いしたい。

・全体を通して、目標像、将来像、指標、目標という言葉が混在しているので整理が必要。

・主体の書き方について、「あらゆる人々」としてまとめてしまうと、「子ども」や「思春期世代」が薄まってしまう。丁寧に記載すべき。

②みどりに関わる動向

・p.19 の「みどりの多面的価値」では、不動産的な要素が前面に出ていることに違和感があり、「みどりと地域価値」の方が適切と感じる。都心部や住宅密集地において緑を増やすことによる影響（地域の印象が良くなる、不動産価値が上がるなど）が大きいことを念頭に、施策の検討ができると良い。

・p.19 の「みどりの多面的価値」の「みどりと健康」、「みどりと子供」について、元々みどりに付随する効果の言及にとどまっている。より具体的な記載が

望ましい。

・p.19 の「みどりの多面的価値」の「みどりと子供」の整理では、子育てやコミュニティ形成の視点も必要。これらの整理を行うことで、子ども・子育て世代にアンケートを取ることへの裏付けにもなる。

③課題

・p.21 の「みどりの量」と「みどりの構造」の課題はもっと詳しく書くべき。前回より記載内容を圧縮したようだが充実すべき。

・p.23 の「「ひと」と「みどり」」では、単なる現状の説明に留まっている記載が見られる。ボランティア等、「活動の継承性に課題がある」というような内容を頭出ししておいた方が次回以降の検討にもつながる。

④目指す姿

・p.27 の「東京のみどりが目指す姿」の図面について、河川・崖線・丘陵を入れた現状図面のラフ画に過ぎず、東京全体のみどりの将来像を示す図としてはふさわしくない。ベース図の上に細かい情報を落とし込み、どのような将来像を目指すかを表現した方が良い。また、凡例・スケール・方位は必須である。

⑤指標

・2050 年を見据えると、将来色々なものさしが出てくると思うが、現段階ではこの指標としたい、ということが分かるように書いた方が良い。今回、「みどり率」のような平面量の指標をあえて示さないのであれば、視認度や満足度は「新規」とするのではなく、例示程度にとどめておくのがよい。

・p.29 の表について、「評価の視点」で分ける必要はない。

⑥エリア別将来像

・具体な数字がないと将来像を議論することができないため、エリア別のみどり率等数値を示すべき。

・エリア別将来像については、まずは区市町村で区切り、ゆくゆくはメッシュで区切り管理していくなど、東京都がデータを把握しながら施策を打っていくと

いう方向性を明確に書いておくという方法もある。

⑦種別将来像

・「まちなかのみどり」について、民間開発等の民有地の中で、例えば中庭などの設えでなく、外から享受できる緑があるかという点も考慮した施策を入れることができると良い。

⑧検討体制

・計画には分野横断的に取り組んでいく観点を入れていく必要があり、必要に応じて様々な部署が関わっていくことを注釈で書いておいた方が良いのではないか。連携という観点では、自治体間連携や産官学民などもある。

⑨その他

・エリア別や種別の目標像について「子ども」「子育て」等の視点がなぜ入ってきたのかということが読み手に伝わるようにすべき。
・様々な方々に読まれることを前提として、「みどり率」についてはその内容も含め、「グリーンインフラ」や「エコロジカルネットワーク」などの計画における重要な用語に関する用語解説が必要だと思う。
・子どもや子育ての視点の書き込みについて。自然との共生においてはリスクとハザードが壁になる。子どもが生き生きのびのび遊べると言っても、大人の立場からするとは「危ない」という意識が入ってしまう現状がある。計画を推進していくためにも、リスクとハザードを十分に認識したうえで取り組んでいくということを記載する必要がある。

２）次回に向けた意見交換

①必要な施策・財源・役割分担

・財源と役割分担について、都の予算でやるところ、民間の取組の促し方、国の取組への関与など、都が直接手を出せないところも含め、今後書いていく必要がある。
・施策の方向性について、「公園管理の充実」と書いてしまうと、子供にとって居

心地が悪くなってしまう印象を受ける。都市公園法の記載も踏まえ、「公園整備と柔軟な運用」という表現の方が良い。また、子ども・地域の人・行政が一緒に公園の運用ルールを考えていくという観点を含めて「柔軟な運用」とすべき。

・環境学習について、子供は体験や遊びを通して学ぶことが多い。「学習」というフォーマルな方向だけでなく、体験や遊びを含めた「豊かな自然体験」といった恵みの享受という表現を幅広く持たせた表現にすべき。

②目標設定方針

・数値目標に馴染まないものもある。細かく設定し、何年かおきに足りないところ関係者で分析・議論しながらケアしていくのが大切ではないか。数値に主眼を置いてしまい、細かく現状を捉えることができないということがないようにすべき。モニタリングの仕方を目標化するというやり方もある。

・緑視率については場所の選び方次第かと思う。AI で物体認識をするなどの客観的な方法も併せて検討すべき。

・海外の計画では公平性を考慮し、立場が弱い人の視点から緑の状況を把握して取りこぼしがないように施策を打っている。平均値で目標設定をするとその点が見えなくなるため、それらの人がどういう状況にあり、どう改善されたかを追える観点が必要。

・公園へのアクセス性を計算する際、対象とする公園面積の下限値を変えて試すと良い。一般的には少なくて 500 ㎡、通常 1000 ㎡が核となる公園として認識されている。

・現段階では海外比較できる樹木被覆率を出しておくべき。

・指標については、地区別や分野別も含めて目標に沿ったデータを自動的に作れるようにすべき。

・子供の目線から、利用可能な緑の割合を測る必要がある。都心の緑には立ち入り禁止やボール遊びが禁止されている緑地も多い。総合満足度はあらゆる人々として一緒にするのではなく、子供や子育てからの視点もしっかり押さえてほしい。

・子どもたちの通学の際、熱中症のリスクが非常に高まっている。具体取組を進める際は、学校までの通学路における緑被率、樹冠被覆率なども把握する必要

がある。

・遊び空間はできる限り規制を排除していけるようにすべき。

・アンケートでは、子供たちの遊び場が増えたかどうかという設問を加えて、増やしたことで得られたメリット（自己肯定感や睡眠の質向上など）について、子ども・親双方の視点で、緑を積極的に開放していくことが子供にとって良い影響があるということを示していけるのではないか。また、子供の年代、区部・多摩部のエリア別でも結果は異なってくると思う。

・東京都はみどりについて多岐にわたる特徴を持つため、目標設定はエリア別にしないと意味がない。現状をエリア別に押さえた上で、どれだけ向上できるかということを踏まえて目標設定すべき。

・区市の当事者意識の向上を図るためにも、エリアについては実用的な範囲で区市別に扱うというようなことを書いておくべき。

以上